

## 「これからの運動器理学療法分野の未来」

所属 さくらい悟良整形外科クリニック  
役職 リハビリテーション科 科長 氏名 榮崎彰秀

### 著者連絡先

所属：さくらい悟良整形外科クリニック リハビリテーション科  
役職 科長 氏名 榮崎彰秀  
郵便番号 〒631-0022 住所 奈良市鶴舞西町 1-16 マツヨシビル 2F  
TEL:0742-81-9817  
Email: eichan\_seibu@yahoo.co.jp

「2045年問題」「理学療法士の過剰供給時代」「若いセラピストへのメッセージ」の3つの学会テーマに基づき、運動器理学療法分野の未来について、私なりの見解を述べさせて頂き、ご参加頂く先生方と一緒に考えていきたいと思えます。

2045年には、AIなどの技術が自ら人間より賢い知能を生み出すことが可能になるSingularity（技術的特異点）が起こると予測されており、それを越えた先には人工知能がヒトに代わって科学技術の進歩の主導権を握る未来がやってくるともいわれています<sup>1)</sup>。同時に、本邦での高齢化率は40%に迫る状態になると考えられており、様々な転換点が同時に訪れることが予想されます。リハビリテーション業界も同様に、我々理学療法士の数は年々増加し、同年には現在の約2倍である40万人近くの免許保有者が誕生する可能性があります。しかし、この数字は供給数が需要数を超えることが予想されており、今後我々を取り巻く情勢は非常に厳しくなることが示唆されます。

では我々はどこに、どのように進んでいけばいいのでしょうか？現在、日本理学療法士協会は生涯学習制度として、多様な障害像に対応できる能力を有する「登録理学療法士」と、より専門性の高い臨床技能を有する「専門理学療法士・認定理学療法士」の制度を設けて国民に対して理学療法士という専門職の質を保証するようにすすめられています。しかし、この制度に則って資格の取得や更新をするだけではなく、各々が「進化」し続けることが必要であると思えます。

運動器理学療法分野も現在まで進化し続けている分野だと思います。特に近年、運動器理学療法分野で進化しているものは「超音波画像診断装置を使用した理学療法」が挙げられると考えられます。超音波画像診断装置は、非侵襲で身体に負担のかからない検査（評価）装置であり、我々理学療法士にとっては、自身が実施した理学療法評価や治療が現在進行形で確認でき、またその整合性（マッチング）を確認でき得る装置でもあります。

つまりセラピストとして、質の向上を考えるのであれば、避けては通れないツールではないか？とも考えられます。これからの運動器理学療法分野においては、評価や治療と超音波画像との整合性をいかに高めるかが進化の鍵になってくるのではないかと私は考えております。

当日の講演では、超音波画像診断装置の基礎的な内容<sup>2)</sup>から、筆者が経験した症例などを提示<sup>3)</sup>し「運動器理学療法分野の未来」に少しでも繋がる内容をお話し出来ればと考えております。

#### 【文献】

- 1) 猪俣武範:2045 年は“ハイブリッドメディシン”の幕開け IoT 時代到来! そのとき, 病院はどう変わる?. ナーシングビジネス 11(9): 832-838, 2017.
- 2) 林典雄:運動療法のための運動器超音波機能解剖 拘縮治療の接点, 文光堂, 東京, 2015, pp 2-11.
- 3) 榮崎彰秀・他:超音波画像診断装置を用いた肩腱板断裂修復術後症例の経時的血流評価. 臨床雑誌整形外科 70(10):1080-1082, 2019